【 22 】

氏　　名	杉浦　健（すぎうら　たけし）
学位(専攻分野)	博　士（教　育　学）
学位記番号	教　博　第 14 号
学位授与の日付	平成 9 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
研究科・専攻	教育学研究科教育方法学専攻
学位論文題目	学業及びスポーツ場面における達成動機づけ理論についての実証的研究
論文調査委員	（主　査）教授 坂野　登　　教授 天野正輝　　助教授 子安増生

論　文　内　容　の　要　旨

人が目標に向かって努力し，物事を達成しようとするとき，人を動機づけているものを達成動機という。しかし高い達成動機をもったからといって，目的とした高い達成を成し遂げることができるとは限らない。第1章「序論」では，このような問題点を明らかにするために，達成動機づけ研究の概観を通して達成動機づけ概念の明確化を行った結果，社会的達成動機と個人的達成動機の2つの異なった概念があることを明らかにした。他方，目標志向研究で明らかにされた成績目標と習熟目標という2つの動機づけの志向性が，上記の2つの達成動機のはたらきを明らかにする上で有効であり，達成場面における不適応的行動を説明しうることを明らかにした。本研究では，青少年のもつ主要な達成場面として学業場面とスポーツ場面とを考え，目標志向の枠組みによってそれらの場面における達成行動を説明しようとした。

第2章「公的自己意識が自己イメージの視点に与える影響について」は，人が自分の姿をイメージしたときに見られる2つの視点イメージ，即ち，イメージの中の場面に実際いるかのような内的視点イメージと，自分の姿を自分で観察しているような外的視点イメージの違いが，自己意識や情動性，不安などと関連し，スポーツなどの達成場面における成績に影響を与えているという指摘を受けて行われた調査研究である。目標志向を引き起こす刺激として使われている公的自己意識を用いて上記の2つの視点イメージとの関係を見たところ，公的自己意識の高い状況，或いは公的，私的に関わらず，特性として自己意識の高いものは，外的視点イメージを取りやすいことが明らかになった。

第3章「クラスの学習目標の認知が原因帰属と期待・無気力感に与える影響」では，小学5，6年生を対象に，算数及び社会の学業場面における原因帰属，期待及びクラスの目標志向の違いの認知に関する調査が行われた。その結果，期待尺度はやればできるという気持ちを表す結果期待，努力できるという確信を表す効力期待，及び無気力感に分かれることが示された。ここでクラスの学習目標が，成績目標だと認知されている場合には，無気力感が高くなり，無気力感が高いことで，失敗の努力帰属がやればできるという気持ちにつながらなくなってしまうことが明らかになかった。

第4章「スポーツにおける目標志向および自己能力認知が動機づけパターンに与える影響」では，競技スポーツ場面において，目標志向と自分に能力があるかどうかについての認知としての自己能力認知が動機づけに対してどのような影響を与えるかを明らかにしようとした。大学の陸上競技部に所属する選手に対する質問紙調査の結果では，習熟目標は高い内発的動機づけや高い練習意欲などの適応的な動機づけと結びついていたが，成績目標は動機づけとはほとんど関連していなかった。また自己能力認知が低いと，内発的動機づけは低く，競技継続の意志は弱いが，習熟目標が高ければ，例え自己認知能力が低くとも適応的な動機づけが保たれることが明らかになった。

第5章「スポーツ選手としての心理的成熟についての理論的研究」では，心理的成熟を表す特徴として，「心身一体感」「習熟目標」「自律性」「目標の明確化」「自己受容」がモデルとして提起され，第6章「スポーツ選手としての心理的成熟についての実証的研究」では，そのモデルの妥当性を実証的に明らかにしようとした。その結果，心理的成熟は，「目標の明確化」「自己把握」「自律的達成志向」という危機を経験することによって向上しやすい特徴と，「身体的有能感」「プラス思考」という危機によっては変化しにくい，身体的能力と密接に関わる特徴とに分かれることがわかった。前者は継続意志や練習意欲，後者は試合での実力発揮と関係することが明らかになった。第7章「総括」では，本研究における研究成果の比較が行われ，その結果適応的な達成動機とは，自分は自分で変えられるのだという自己概念をもち，自分なりの目標に向かって自分を変えていく過程を喜びと感じることであると結論されている。

論文審査の結果の要旨

人は人生において目標を立て，多かれ少なかれ目標を達成しようとする。人をこのように駆り立てるものを達成動機といい，心理学では古くから研究の対象とされてきた。論者は達成動機についての多くの学説の検討から，学習場面とスポーツ場面に共通して設定される目標志向として，成績目標と習熟目標という2つの動機づけの志向性を考え研究を進めている。この2つの目標志向性の設定は，おおむね成功したといえよう。論者はもともと陸上競技のランナーであり，競技場面におけるあがりの問題に関心を抱いていた。オリンピックに出場できるだけの力をもった選手の中で，最終選考会で自分の力を十分に発揮できないためにふるい落とされていく人たちはどのような人なのか。このような問いに答えるために計画されたのが，第2章の公的自己意識と自己視点イメージの関係に関する調査であった。他人の視線を気にすると，不安やあがりが生じてくるのである。

また，非常勤講師として夜間高校で教鞭をとった論者の経験が，第3章の学業場面での調査への動機づけとなっている。学業での失敗を努力不足に帰属させるような傾向（失敗の努力帰属）は，やればできるという気持ちとしての期待につながると，原因帰属理論では考えられていたが，実際調査してみると両者の関係は明確でなかった。そこで目標志向の違いが，両者の関係を左右するのではないかと考えて研究を進めたわけである。無気力感はクラスの学習目標が成績目標であると強く認知していることで高くなり，無気力感が高いと「失敗したのは努力が足りなかったためである」という帰属意識は，「やればできる」という気持ちにつながらなかった。他方クラスの学習目標が習熟目標である場合には，そこからは無気力感は生じなかったのである。

学生時代陸上競技部に属していて，スポーツ心理学に関心の深かった論者が，最も研究したかったことは，第4章から第6章にかけて取り上げられた，スポーツにおける目標志向と動機づけパターンの関係，及びスポーツ選手としての心理的成熟の問題であった。第4章では，学業場面と同様に，競技スポーツにおいても適応的な動機づけにとって習熟目標が必要であることを示唆することができた。また第5章と第6章では，スポーツ選手にとっての心理的成熟とは何かを示唆するような実証的資料を得ることができた。しかしスポーツ心理学に関するこれらの研究部分は，論者がごく最近始めたばかりの領域であり，これからの発展に期待される部分が多いといえる。

ただ，用語上検討を要するいくつかの問題，例えば「目的」と「目標」の使い分け，習熟目標（特に習熟概念の歴史的経緯）という用語の妥当性などについて，一層の吟味が必要であると思われる点もあり，また構成，展開上部分的な改善の余地があるという感は否めない。しかし，学業及びスポーツ場面における習熟目標の意義を見出し，さらにはスポーツ心理学にとっての重要な課題であるあがりや不安，或いは心理的成熟の問題を追求した本論文の価値は高い。

よって，本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。また，平成9年2月19日，論文内容とそれに関連した試問を行った結果，合格と認めた。